

第2節 都市環境

都市(まち)が快適であるための重要な要素として、「自然との共生」「都市としての利便性」「バリアフリー化の推進」などが挙げられます。ここでは、これらの項目について尋ねました。

1. 自然とのふれあい

自然とのふれあいに関して、現状評価・満足度に、明確な地域差が見られました。「公園や街路樹など身近に緑が多い」という項目について、山間部では現状評価・満足度も群を抜いて高かった一方で、海岸部ではいずれも低くなりました(図5参照)。

「身近に鳥や昆虫など生き物が多種せい息している」という項目についても、山間部では、現状評価・満足度ともに高い結果であった一方で、市街地・海岸部ではいずれも低い結果となりました(図6参照)。

また、身近な自然環境に関しては、年齢によって満足度に差があるようです。「農地が減ったり荒れたりしている」という項目では、現状評価においては

それほど差は見られませんでした。満足度においては年齢によって差が見られました。20代では「満足」「まあ満足」を合わせて50%を超えましたが、年齢が上がるにつれて満足度は低くなり、70歳以上では20代の半分の25%程度でした(図7参照)。かつての自然の豊かさを知っている年代ほど、今の自然環境に満足していないようです。

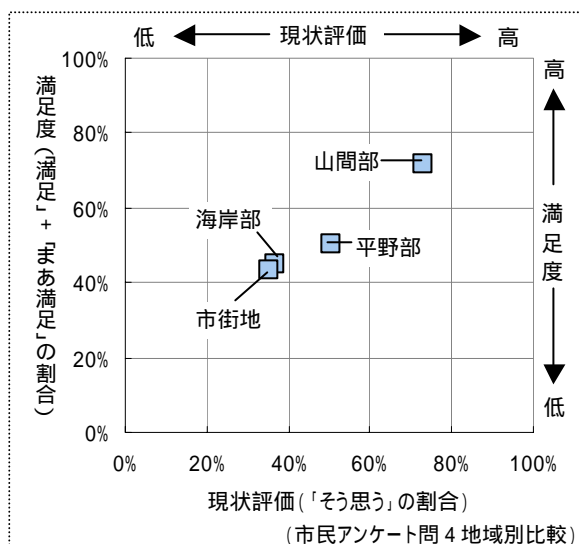


図6 「身近に鳥や昆虫など生き物が多種せい息している」についての現状評価と満足度

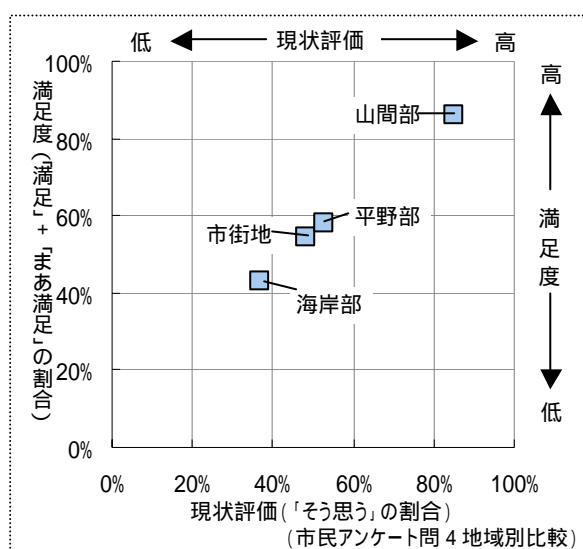


図5 「公園や街路樹など身近に緑が多い」についての現状評価と満足度

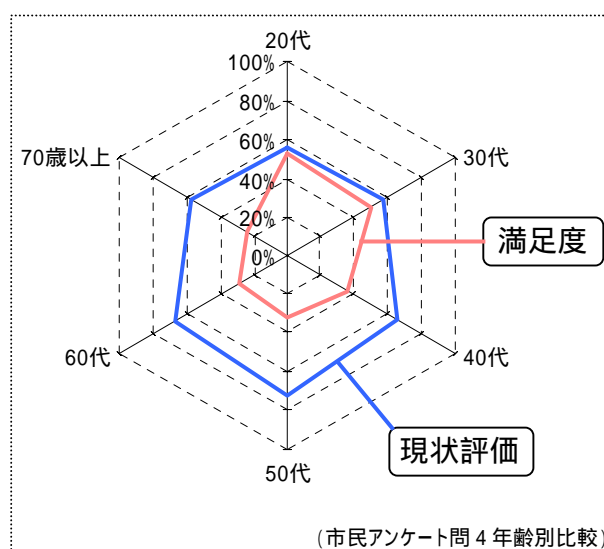


図7 「農地が減ったり荒れたりしている」についての現状評価と満足度

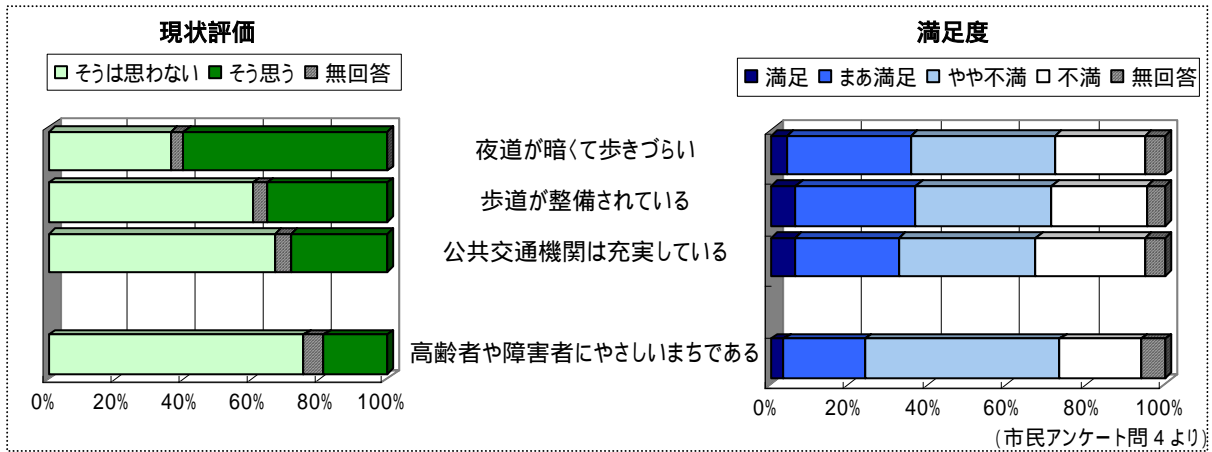


図8 安全性・利便性とバリアフリーについての現状評価と満足度

2. 安全性と利便性

「夜道が暗くて歩きづらい」「歩道が整備されている」「公共交通機関は充実している」のまちの安全性・利便性に関する項目において、現状評価では60%以上の市民が低い評価をしています。また、満足度においても「満足」「まあ満足」を合わせて40%以下という結果となりました(図8参照)。

また、「自動車をなるべく使わず、バス、電車など公共交通機関を利用する」という問いに対して、全体では「いつも行っている」「時々行っている」「今は行っていないが今後は行いたい」とする人が半数以上にのぼりました。しかし、年齢別では、20代では「今後とも行うつもりはない」とする人が半数以上にのぼるなど、若い人ほど日常の移動手段として自家用車を利用している傾向があるといえます(図9参照)。

3. 高齢者や障害者にやさしいまち

「高齢者や障害者にやさしいまちである」という項目において、市民全体では、現状評価・満足度とも安全性・利便性に関する項目に比べ、低い結果となりました(図8参照)。

年齢別にみると、60代や70歳以上の人に比べて、20代~50代の人の方が、現状評価・満足度ともに低くなっています(図10参照)。

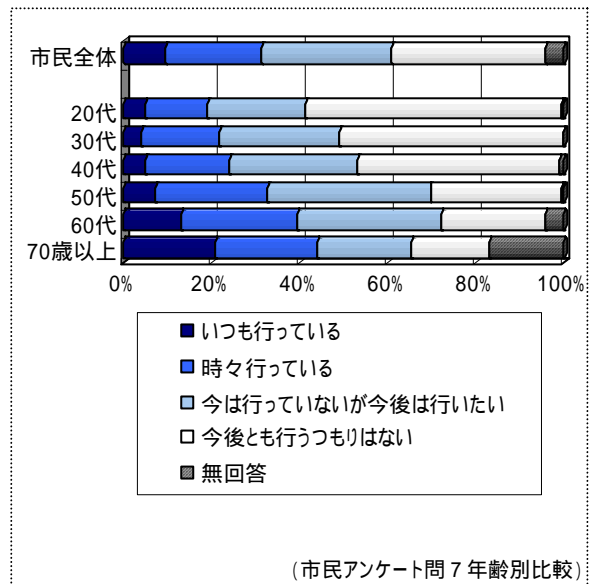


図9 「自動車をなるべく使わず、バス、電車など公共交通機関を利用する」についての年齢別比較

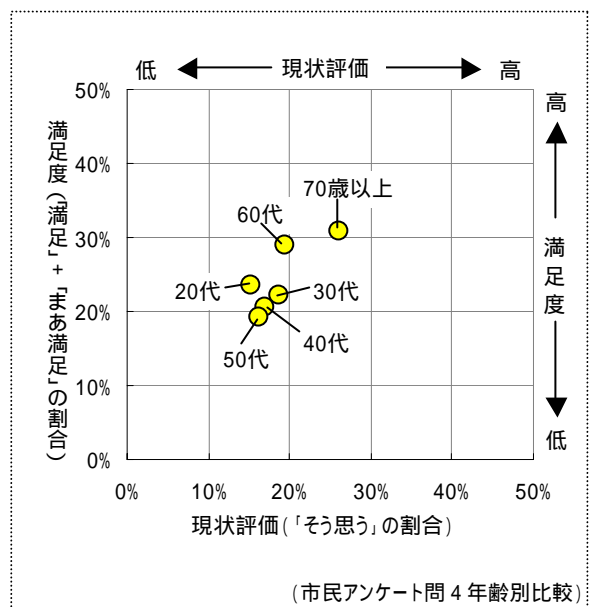


図10 「高齢者や障害者にやさしいまちである」についての年齢別比較

また、在住期間が10～15年未満の人は、現状評価、満足度ともに最も厳しく評価しており、15～20年未満の人も、満足度が10～15年未満の人と同様に低い結果となりました(図11参照)。

「今後、よりよい環境をつくっていくための施策として特に重要だと思われるもの」として、「高齢者や障害者に配慮したまちづくり」を選んだ人を年齢別にみると、70歳以上が最も多い結果となりました(図12左グラフ参照)。

在住期間では、15～20年未満の人が「高齢者や障害者に配慮したまちづくり」を選んだ割合が他に比べて多い結果となりました(図12左グラフ参照)。それに加え、40代で在住期間15～20年未満の市民が、特にこの施策を重要視しています。

職業別では、学生が他の業種に比べ47.8%と最も高い結果となりました(図12右グラフ参照)。学生は、授業やボランティア活動を通じて高齢化問題について学ぶ機会が多いためであろうと考えられます。

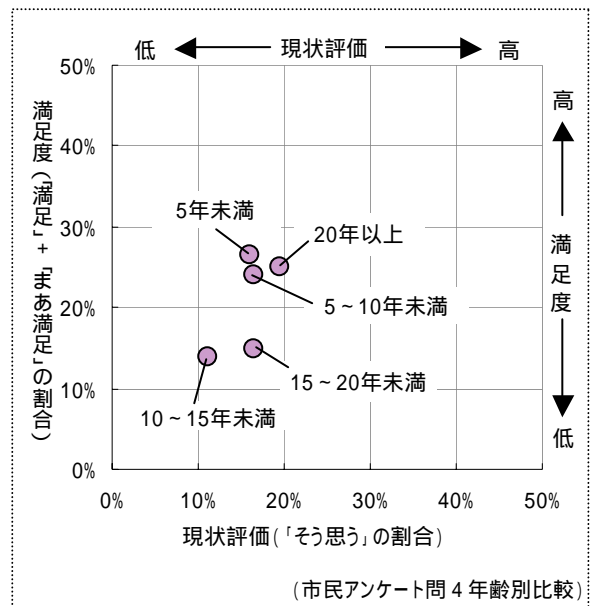


図11 「高齢者や障害者にやさしいまちである」についての在住期間別比較

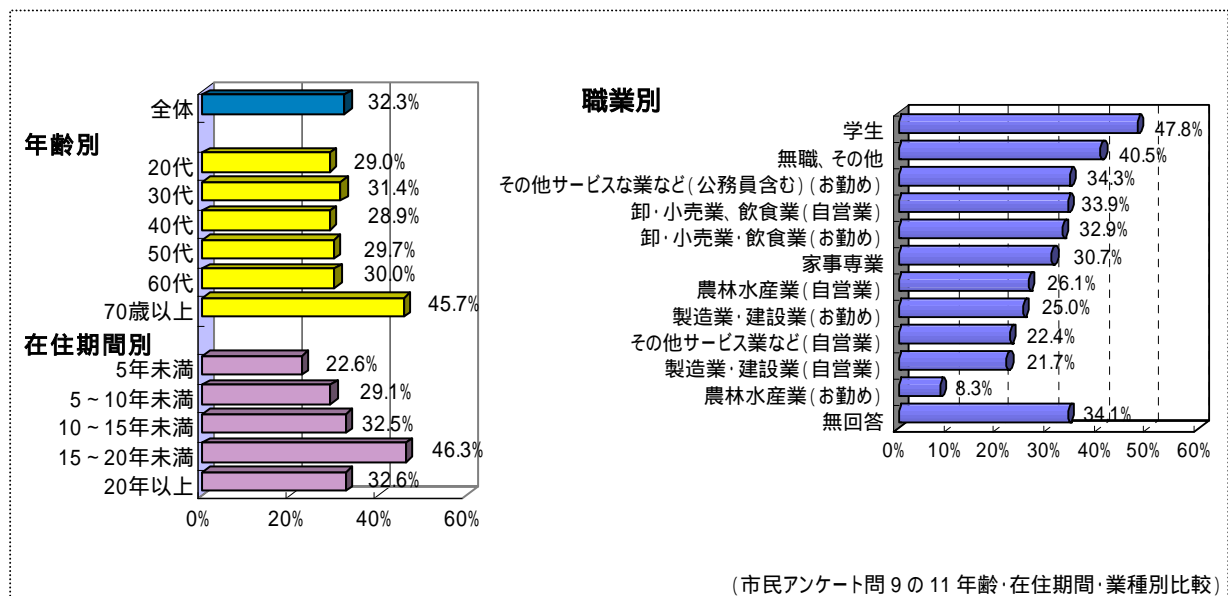


図12 「今後、よりよい環境をつくっていくための施策として、特に重要だと思われるもの」で「高齢者や障害者に配慮したまちづくり」を選んだ人の年齢別比較、在住期間別比較および職業別比較

まとめ

自然環境に恵まれている当市でも、地域によって評価が分かれ、山間部以外の地域では、周辺の自然環境に対する評価が低い結果となりました。これは、諸開発に伴う都市化が大きく関係していると思われます。また、かつての自然を知っている人ほど現状の自然環境に満足していないなど、自然環境に対する評価も世代によって異なっています。今後は、全ての地域で身近に緑に接することができるよう環境を回復し、都市と自然との共生を目指すことが重要であると考えます。

また、利便性においても、自動車が主な移動手段である当市の現状を表した結果となりました。一方で、年齢が高くなるほど公共交通機関を利用したいと答えており、高齢者に対する公共交通機関の整備は今後の大きな課題のひとつであるといえます。

バリアフリーに関しては、特に必要と感じるであろう高齢者の方が施策の必要性を訴えています。それに加え、他の状況と当市の現状をよく知り、問題点を実感することのできる人や、授業やボランティア活動を通じて高齢化問題を学んでいる学生などが、高齢者や障害者に配慮したまちづくりの重要性をより感じており、バリアフリー関連施策の一層の推進が望まれます。また、「高齢者だけでなく、幼児など全ての弱者に対して配慮して欲しい」とする自由意見が複数ありました。このように、すべての人が利用しやすいことを考えた「ユニバーサルデザイン」の考え方を意識したまちづくりを進めることが大切であると思われます。

キーワード

都市と自然との共生

安全性・利便性

ユニバーサルデザイン